

アモス書4-6章「サマリヤの宮殿への憎しみ」

1A どうしても主に帰られない民 4

1B バシヤンの雌牛 1-5

2B 背きに警告する神 6-13

1C 何度となく拒む民 6-11

2C 神に会う備え 12-13

2A 公義を捨てる者たち 5

1B 主を求めよとの呼びかけ 1-17

1C 倒れ、ほとんどいなくなる民 1-7

2C 門の裁きを憎む者 8-17

2B 叶わない期待 18-27

1C 昼を闇にする主の日 18-24

2C 偶像に固執する民 25-27

3A 宮殿で贅沢に暮らす者 6

1B 破滅のことで悩まない者たち 1-7

2B サマリヤを敵に引き渡す神 8-14

本文

アモス書 4 章から見ていきます。私たちは前回、北イスラエルに対して神が、その犯した罪を宣告する預言を読んでいきました。金のために貧しい者をうった。弱い者への裁きを曲げた。父と息子が同じ女のところに通っているなど、あてはならないことを行ない、そして彼らの宗教はそれを戒めるところか、彼らの欲望を持たず手段にさえなっていた偶像礼拝であったということです。そして主が、彼らの宮殿がかすめ奪われるという預言を行われます。アッシリヤがこの預言の三十年後にはサマリヤを陥落させ、彼らは捕囚の民となります。4 章はその続きです。

1A どうしても主に帰られない民 4

1B バシヤンの雌牛 1-5

4:1 聞け。このことばを。サマリヤの山にいるバシヤンの雌牛ども。彼女らは弱い者たちをしいたげ、貧しい者たちを迫害し、自分の主人たちに、「何か持って来て、飲ませよ。」と言う。

アモスは 3 章 1 節でも、「聞け。このことばを。」という言葉から預言を語りました。5 章 1 節の新しい説教でも「聞け」と呼びかけています。聞く耳の持たぬ者たちに対して注意喚起をしておられます。そして、「サマリヤの山にいるバシヤンの雌牛ども」と呼ばれています。北イスラエルの宮殿や豪華な家に住んでいる、酒に酔いしれる婦人たちの姿です。「バシヤンの雌牛」に例えています。

バシャンは、ギルアデの北、ヘルモン山の南にある高原で、今のゴラン高原です。そこは放牧に非常に適したところで、かつてイスラエルの部族の一部が、モーセに「ヨルダン川のこちら側で住まわせてください。」と言わしめたほどです。牛を放牧するのに豊かな地でした。彼女たちがアル中になっていて、自分の夫に「何か持って来て、飲ませよ。」と言っています。

4:2 神である主は、ご自分の聖にかけて誓われた。見よ。その日があなたがたの上にやって来る。その日、彼らはあなたがたを釣り針にかけ、あなたがたを最後のひとりまで、もりにかけて引いて行く。4:3 あなたがたはみな、城壁の破れ口からまっすぐ出て行き、ハルモンは投げ出される。.. 主の御告げ。..

主は「ご自分の聖にかけて」と言われます。主の聖なるご性質によれば、弱者を犠牲にした豪華な生活は耐えられないものだったのです。それで主は、アッシリヤがサマリヤを滅ぼすようにされます。ここにある「釣り針」とは、文字通りのことです。彼らは鼻や口に鉤輪を付けて捕らえ移したのです。そして「城壁の破れ口」とはサマリヤの城の破れ口です。「ハルモン」とありますが、「ヘルモン山」のことかもしれません。彼らがまっすぐ、サマリヤからヘルモン山の方面へ、つまりシリヤの地域、それからアッシリヤの遠く彼方に引き連れられてしまいます。

4:4 ベテルへ行って、そむけ。ギルガルへ行って、ますますそむけ。朝ごとにいけにえをささげ、三日ごとに十分の一のささげ物をささげよ。4:5 感謝のささげ物として、種を入れたパンを焼き、進んでささげるささげ物を布告し、ふれ知らせよ。イスラエルの子ら。あなたがたはそうすることを好んでいる。..神である主の御告げ。..

「ベテル」は、北イスラエルの南端にある町で、北端の町ダンと並んで金の子牛があったところでした。そして「ギルガル」は、ヨルダン川をヨシュアたちが渡った後、エリコに行く前のところにある町で、サウルがそこで王として即位したところ、また彼が自分で、勝手に祭壇でいけにえを捧げたところでもあります。ここも偶像礼拝の盛んな所となっていました。しかし本人たちは、十分の位一、感謝の捧げ物、進んで捧げる捧げ物など、表面的、部分的には神の律法に書かれていることを真似ているので、主に仕えていると思いをこませていたのです。

そこで、主は突き放すように、「ますますそむけ」と言われています。なぜなら、「あなたがたはそうすることを好んでいる」からだと言われます。主の言葉をどうしても聞かないのであれば、主はその彼らを頑ななままにしておかれるしか、方法はありません。彼らの自由意志を侵してまで、彼らを変えることはおできにならないからです。ですから、自分たちが行なっていることによって、どんな結果になるかを自分たちで知るまでそのままにしておくしかないので。例えば、放蕩息子の譬えで、第息子が、遠い国で豚のえさのイナゴ豆で腹を満たしたいと思うほどになるまで、父は何もできなかったのと同じです。

イスラエルは、アッシリヤの危機を感じた時にこのように活路を見いだしました。宗教的になっていきました。しかし、それは御心にかなったことどころか、御心に真っ向から反することでありました。主に近づくのではなく、主から離れる行為でありました。私たちは、何か問題が起こると、その問題を打開しなければいけないとして行なうことが全て正しいとは限りません。むしろ、主なる神ではない何か他のものに期待をかけている、すなわち偶像礼拝になってしまうことがあるのです。

2B 背きに警告する神 6-13

そして主は、段階的に、彼らが自分のしていることに気づき、主のもとに立ち帰るように徴を与られます。午前礼拝で読んだとおりですが、もう一度読んでみましょう。

1C 何度となく拒む民 6-11

4:6 わたしもまた、あなたがたのあらゆる町で、あなたがたの歯をきれいにしておき、あなたがたのすべての場所で、パンに欠乏させた。それでも、あなたがたはわたしのもとに帰って来なかった。…主の御告げ。…4:7 わたしはまた、刈り入れまでなお三か月あるのに、あなたがたには雨をとどめ、一つの町には雨を降らせ、他の町には雨を降らせなかった。一つの畑には雨が降り、雨の降らなかった他の畑はかわききった。4:8 二、三の町は水を飲むために一つの町によろめいて行ったが、満ち足りることはなかった。それでも、あなたがたはわたしのもとに帰って来なかった。…主の御告げ。…4:9 わたしは立ち枯れと黒穂病で、あなたがたを打った。あなたがたの果樹園とぶどう畑、いちじくの木とオリーブの木がふえても、かみつくないなごが食い荒らした。それでも、あなたがたはわたしのもとに帰って来なかった。…主の御告げ。…4:10 わたしは、エジプトにしたように、疫病をあなたがたに送り、剣であなたがたの若者たちを殺し、あなたがたの馬を奪い去り、あなたがたの陣営に悪臭を上らせ、あなたがたの鼻をつかせた。それでも、あなたがたはわたしのもとに帰って来なかった。…主の御告げ。…4:11 わたしは、あなたがたをくつがえした。神がソドムとゴモラをくつがえしたように。あなたがたは炎の中から取り出された燃えさしのようであった。それでも、あなたがたはわたしのもとに帰って来なかった。…主の御告げ。…

ここに書かれている事柄は全て、申命記 28 章と 29 章に書いてあることです。モーセが約束の地のすぐそばまでイスラエルの民を導きました。ヨルダン川の東、エリコの町の向かい側にある、モアブの草原にまで連れて行きました。そして最後に、主の言葉を伝えるのです。その中で、主の御声に聞き従い、主の命令を守り行なうなら、主が彼らに約束されたように、国々の民の上にあなたがたを高く上げようと言われました。それから、もし聞き従わず、命令を守り行なわないなら、これこれの呪いがあなたがたに臨むと警告しています。その中に、パンに事欠くこと、雨が降らないこと、立ち枯れと黒穂病で、作物が打たれること。いなごが食い荒らすこと。そして疫病にかかり、敵前で敗走すること、そしてソドムとゴモラのように焼けた土地と化すこと。すべてを語られ、それらが見事に神の言われた通りになることを、アモスが語っているのです。

主が少しずつ、少しずつ、彼らに語られていることに気づいてください。それらの災いは決して、彼らを無意味に懲らしめているのではなく、愛をもって彼らのご自身に立ち戻るように気づかせるためなのです。神の慈しみに基づく悔い改めでなければ、主との交わり、命ある関係は回復できないからです。災いの中に、主の御心があります。それは、災いのような危機的状況でなければ、内省して主との信仰を確認できない深い部分に触れることが出来る機会となります。イエス様のところに、不幸なことが起こったことを報告した時のことを思い出してください。「ルカ 13:1-5 ちょうどそのとき、ある人たちがやって来て、イエスに報告した。ピラトがガリラヤ人たちの血をガリラヤ人たちのささげるいけにえに混ぜたというのである。イエスは彼らに答えて言われた。「そのガリラヤ人たちがそのような災難を受けたから、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い人たちだったとでも思うのですか。そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。また、シロアムの塔が倒れ落ちて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいるだれよりも罪深い人たちだったとでも思うのですか。そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。」悔い改めが必要で、主がそれらの災いを通して語っておられたのです。このように、災いによって、「なぜ神はこのような悪いことを許されるのか。」として、ますます神に対して頑なになることもできるのですが、同じ災いによって、主の懲らしめとして甘んじて受け、その御心の深い部分を知ることができるようになり、成長できる機会ともなるのです。

2C 神に会う備え 12-13

4:12 それゆえ、イスラエルよ、わたしはあなたにこうしよう。わたしはあなたにこのことをするから、イスラエル、あなたはあなたの神に会う備えをせよ。4:13 見よ。山々を造り、風を造り出し、人にその思いが何であるかを告げ、暁と暗やみを造り、地の高い所を歩まれる方、その名は万軍の神、主。

午前礼拝で、ここをお話しさせていただきましたので、聞いていない方はぜひ聞いてください。「わたしはあなたにこうしよう」とは具体的に何か、そして、「神に会う備え」とは具体的に何かを次に教えられます。主がご自身を山を造られ、風を造り、そして人の思いを告げ、暁を暗闇にするような方で、地の高き所を踏みにじるような偉大な力のある方、命をも左右される方、全てをことごとく知られるとして紹介しています。そして万軍の主とされていますから、戦いの側面を語っておられます。その具体的なことは、次の5章に続きます。

2A 公義を捨てる者たち 5

1B 主を求めよとの呼びかけ 1-17

1C 倒れ、ほとんどいなくなる民 1-7

5:1 イスラエルの家よ。聞け。私があるあなたがたについて哀歌を唱えるこのことばを。

再び、「聞け」という言葉です。イスラエルの家全体に対して語っておられます。そして「哀歌」です。人が死んで哀しむ時に歌うものです。イスラエルの家が倒れてしまうことを哀しみ歌います。

5:2 「おとめイスラエルは倒れて、二度と起き上がれない。彼女はおのれの地に投げ倒されて、これを起こしてくれる者もない。」5:3 まことに、神である主はこう仰せられる。「イスラエルの家で、千人を出征させていた町には百人が残り、百人を出征させていた町には十人が残ろう。」

万軍の主、神に会う備えとは、アッシリヤ捕囚のことを指していました。「おとめ」と書いてあるのは、イスラエルがまだ外敵の侵略を受けていないからです。ヤロブアム二世の時のイスラエルは、外部から攻撃を受けていましたが、ソロモンの時以来、一度も侵略されたことはありませんでした。けれども、「二度と起き上がれない」というのは、根こそぎ捕え移されてしまうからです。しかし、「千人を出征させていた町には百人が残り、百人を出征させていた町には十人が残ろう」とあるように、人口が激減するのですが、僅かに残っていることを示唆しています。ここが主のお心なのだと思います。滅ぼすために彼らに対して戦われるのではなく、懲らしめて残ったところから回復したいという思いが伝わってきます。

5:4 まことに主は、イスラエル家にこう仰せられる。「わたしを求めて生きよ。5:5 ベテルを求めな。ギルガルに行くな。ベエル・シェバにおもむくな。ギルガルは必ず捕え移され、ベテルは無に帰するからだ。」5:6 主を求めて生きよ。さもないと、主は火のように、ヨセフの家に激しく下り、これを焼き尽くし、ベテルのためにこれを消す者がいなくなる。

「わたしを求めて生きよ。」「主を求めて生きよ。」この分かり易い呼びかけが、アモスの預言の要だと思いますし、私自身も最も語られました。豊かな社会にいますと、いろいろな価値観が出て来ます。いろいろなことが求められます。それで、「これをしなきや、あれをしなきや」とあくせくしている割には、物事が実質的に進んでいないことを発見します。しかし、主の御心はとてもはっきりしています。「わたしを求めて生きよ」です。ただ、それだけです。いろんなことをしている姿が、ベテルを求め、ギルガルを求め、またユダ王国にあるベエル・シェバにも偶像がありましたが、そういったところに求めに反映されています。しかし、単純に心から主を求めるのです、主の名を呼び求めるのです。そうすれば、すぐにでも主は、ご自分の憐れみの川を流し出してください。

そして警告として、「ギルガルは必ず捕え移され、ベテルは無に帰する」また「主は火のように…激しく下り、これを焼き尽くし、ベテルのためにこれを消す者がいなくなる」と言っています。主ではないものに救いを求め、それらにすがれば、助けられないばかりか、むしろ救いを自分で遠ざけてしまうこととなります。

5:7 彼らは公義を苦よもぎに変え、正義を地に投げ捨てている。

アモスの預言の中で大事な教えです。正義は、元々「真っ直ぐ」という意味です。神と人、人と人の関係が健全な状態になっていることを指しています。そして、公義はそれが具体的な個人生活、社会生活においてしっかり適用できているのかどうか、その正しさを話しています。つまり、司法おける正しさです。次に、門における裁きに対する神の預言が始まりますが、弱い者、貧しい者が踏みにじられる社会において、彼らが救われることが正義であり、また裁判の席においても曲げられることなく公正に判断することが公義なのに、それを怠るところか、不正や不義の道具とも化している姿を、苦よもぎと形容しています。苦よもぎは薬草とも言われますが、多く摂取すると精神攪乱も来します。非常に苦しい、苦い経験のことです。黙示録 8 章には、星が天から降って来て、それが苦よもぎと呼ばれて、川の源を汚したので、それを飲む人々を殺していったことが書かれています。本来、人を守るべき正義が、虐げられる道具に使われていくことは、古今東西どこにでもあります。人の貪欲によって、正義を守るための道具を使って不義を行なっていくのです。

2C 門の裁きを憎む者 8-17

5:8 すばる座やオリオン座を造り、暗黒を朝に変え、昼を暗い夜にし、海の水を呼んで、それを地の面に注ぐ方、その名は主。5:9 主は強い者を踏みにじり、要塞を破壊する。

主が先に、ご自身の偉大な力を表現されておりましたが、ここでも同じです。不義と不正がはびこっている中で、弱い者、貧しい者が全く無力であるときに、彼らを擁護される方があるということです。主が既に律法の中で彼らのために戦われることを、語っておられました。「出エジプト 22:23-24 もしあなたが彼らをひどく悩ませ、彼らがわたしに向かって切に叫ぶなら、わたしは必ず彼らの叫びを聞き入れる。わたしの怒りは燃え上がり、わたしは剣をもってあなたがたを殺す。あなたがたの妻はやもめとなり、あなたがたの子どもはみなしごとなる。」

5:10 彼らは門で戒めを与える者を憎み、正しく語る者を忌みきらう。5:11 あなたがたは貧しい者を踏みつけ、彼から小作料を取り立てている。それゆえあなたがたは、切り石の家々を建てても、その中に住めない。美しいぶどう畑を作っても、その酒を飲めない。

「門」は、城壁のある町の入口であると同時に、そこで行政的、司法的な手続きを取っていました。本来の正しい裁きを彼らは憎んでいました。戒めを与え、正しく語る者を忌み嫌っています。今日、権威が忌み嫌われています。正しいこと、戒めが与えられることを嫌っています。自分の感じることが最も大事であるとされ、それゆえ多くの人が自分の感情を制御できません。そして、貧しい者から搾取しています。そして主は、それへの報いとして彼らが贅沢がもはやできないようにされます。

5:12 私は、あなたがたのそむきの罪がいかに多く、あなたがたの罪がいかに重いかを知っている。あなたがたは正しい者をきらい、まいないを取り、門で貧しい者を押しよける。5:13 それゆえ、このようなときには、賢い者は沈黙を守る。それは時代が悪いからだ。

門での正しい裁きを嫌うだけでなく、その裁きを行なう者たちが賂を取って、それで貧しい者たちの権利を踏みこじってしまうことをここで話しています。ある人の声だけが大きくなり、しかもこのような不正を行なう者たちの声があまりに広がっていく時に、むしろ私たちは、「沈黙」のところに知恵を見いださなければいけません。「賢い者は沈黙を守る」とあります。

5:14 善を求めよ。悪を求めな。そうすれば、あなたがたは生き、あなたがたが言うように、万軍の神、主が、あなたがたとともにおられよう。5:15 悪を憎み、善を愛し、門で正しいさばきをせよ。万軍の神、主は、もしや、ヨセフの残りの者をあわれまれるかもしれない。

6 節と同じように、悔い改めの呼びかけをなさっておられます。6 節では、「主を求めて生きよ」でした。こちらでは、「善を求めよ」です。主は善なるお方ですから、主を求めることは、善を求めることです。善を求めていなければ、主を求めていることになりません。そして主は、すぐにでも彼らを生かしたいという思いがあります。「そうすれば、あなたがたは生き」と言われます。それから、彼らが今、どう思っているのか、主との関係がどうなっているかと思っているかということ、「あなたがたが言うように、万軍の神、主が、あなたがたとともにおられよう」と思っていたことです。これが彼らの考えだったということは驚きです。けれども、私たちキリスト者も同じ事を考えませんか？善を求めず、悪を行なっているのに、それでも主が自分たちと共におられると考えたら、自分を欺いています。そして 15 節で、「もしや、ヨセフの残りの者をあわれまれるかもしれない」と言われます。敵に攻められて、僅かな人数になろうとも、もしかしたら、憐れんでくださるかもしれないとのことです。憐れみというのは、「もしや」という言葉があります。自分が主に要求するようなものではありません、懇願するものです。

5:16 それゆえ、主なる万軍の神、主は、こう仰せられる。「すべての広場に嘆きが起こり、すべての通りで、人々は『ああ、ああ。』と言い、農夫を呼んで来て泣かせ、泣き方を知っている者たちを呼んで来て、嘆かせる。5:17 すべてのぶどう畑に嘆きが起こる。それは、わたしがあなたがたの中を、通り過ぎるからだ。」と主は仰せられる。

敵によって、広場で嘆きが広がります。畑が荒らされたので、農夫が嘆いています。そして、当時は誰が死ぬと泣き屋を雇います。そして、興味深いのは、「わたしがあなたがたの中を、通り過ぎるからだ。」という言い回しです。出エジプト記の過越のことを思い起こさせる表現です。「わたしはその血を見て、あなたがたの所を通り越そう。(12:13)」しかし、今はエジプトへの災いが通り越すのではなく、通り過ぎます。エジプト人が行っていた事と、全く同じ事を行っているのですから。

2B 叶わない期待 18-27

1C 昼を闇にする主の日 18-24

5:18 ああ。主の日を待ち望む者。主の日はあなたがたにとっていったい何になる。それはやみであって、光ではない。5:19 人が獅子の前を逃げて、熊が彼に会い、家にはいって手を壁につけると、蛇が彼にかみつくようなものである。

ここから、「ああ。」という言葉から始まる預言が続きます。すぐ次の節にもありますし、6章1節からもあります。「災いだ」という意味です。「主の日」とは何なのか？それは、主が地上にある不義や悪に対して裁きを行なわれ、神の支配を確立される時、期間であります。ヨエル書にも、またその前のイザヤ、エレミヤ、エゼキエルの大預言書にも出て来ました。今、ここで北イスラエルの大きな問題は、自分たちのために主が敵のために戦ってくださるのだということです。光が到来すると思っていました。ところが、悪を行なっているのですから、立場は逆なのです。主が彼らのために戦うのではなく、彼らに対して戦われるのです！だから光の到来ではなく、光だと思っていたが闇が襲ってきます。そして、主の日のもう一つの特徴は、それは思わぬ時に来るのであり、それから免れることはできないということです。テサロニケ第一5章には、産みの苦しみ、陣痛が始まるようなもので、それから免れることはできないことを言い表していますが、ここでは獅子から逃げても熊が、家で手を壁につけても、蛇が噛みつくことと表現しています。

5:20 ああ、まことに、主の日はやみであって、光ではない。暗やみであって、輝きではない。5:21 わたしはあなたがたの祭りを憎み、退ける。あなたがたのきよめの集会のときのかおりも、わたしは、かぎたくない。5:22 たとい、あなたがたが全焼のいけにえや、穀物のささげ物をわたしにささげても、わたしはこれらを喜ばない。あなたがたの肥えた家畜の和解のいけにえにも、目もくれない。5:23 あなたがたの歌の騒ぎを、わたしから遠ざけよ。わたしはあなたがたの琴の音を聞きたくない。

彼らの自己欺瞞はさらに続きます。彼らは祭りを行なっていますが、神は主の日をそのような祭りのような光の時も、それを闇にすると言われます。8章9-10節で、文字通り、日盛りに地を暗くし、あなたがたの祭りを喪に変えるとあるのです。これが、まさに過越の祭りで十字架にイエス様がかかけられ、正午なのに空が暗くなったことを預言しているものです。主は、ご自身を求めない、善を求めない者の宗教的行為は、それを忌み嫌い、受け入れないと言われているのです。

5:24 公義の水のように、正義をいつも水の流れる川のように、流れさせよ。

宗教的行為ではなく、悔い改めです。ここで、公義と正義を川のように流れさせよ、とありますが、主のもとに立ち帰れば、たちまち公義と正義の神の御霊を溢れさせてくださいます。悔い改めというのは、自分自身がその行ないを改めるものではありません。主のもとに自分を立ち帰らせるので

すから、主が憐れんでご自分の御霊で自分を満たし、そして流れるように義の行ないをするようにさせてくださるのです。

2C 偶像に固執する民 25-27

5:25 「イスラエルの家よ。あなたがたは、荒野にいた四十年の間に、ほふられた獣とささげ物とをわたしにささげたことがあったか。5:26 あなたがたはあなたがたの王サクテと、あなたがたのために造った星の神、キウンの像をかついでいた。5:27 わたしはあなたがたを、ダマスコのかなたへ捕え移す。」とその名を万軍の神、主という方が仰せられる。

イスラエルの民はシナイ山のふもとで金の子牛を造り、それを拝みました。それと同じことをあなた方は行なっていると、主は糾弾されています。「サクテ」も「キウン」も天体を拝む神々です。それゆえにダマスコに捕え移される、つまりアッシリヤに連れて行かれる、ということです。実はここを、ステパノがサンヘドリンで弁明したときに引用した言葉です(使徒 7:42-43)。ですから、来ていたユダヤ人指導者は、「あなたがたが誇るイスラエルの先祖が偶像礼拝を犯したぐらいなら、ましてやあなたがたは偶像礼拝と等しい罪を犯している。」と責められたと理解しました。それでステパノを石打ちにすることを決めたのです。けれども神の民が偶像礼拝の罪を犯すという可能性が、十分にあるのです。ユダヤ人がそれを認められなかったけれども、事実、ユダヤ教徒が神殿そのものに信仰を置いていて、主の声に聞き従っていませんでした。

3A 宮殿で贅沢に暮らす者 6

1B 破滅のことで悩まない者たち 1-7

6:1 ああ。シオンで安らかに住んでいる者、サマリヤの山に信頼している者、イスラエルの家が行って仕える国々の最高の首長たち。6:2 カルネに渡って行って見よ。そこから大ハマテに行き、またペリシテ人のガテに下って行け。あなたがたはこれらの王国よりすぐれているだろうか。あるいは、彼らの領土はあなたがたの領土より大きいだろうか。

サマリヤの山、すなわち北イスラエルだけでなく、シオン、すなわち南ユダの都エルサレムも含めて語っておられます。彼らは自分たちを、「行って仕える国々の最高の首長たち」と自負しています。南はウジャヤ王、北はヤロブアム二世、まさに周囲の国々が自分に仕えていると自負していました。しかし、彼らはアッシリヤに浸食されていました。カルネやハマテはアラム(シリヤ)にある町々、そしてペリシテの町ガテです。彼らの国々より優れているとイスラエルもユダも思っていたが、いや、優れていないのだよと言っておられます。領土も周囲の国々を合わせればイスラエルとユダより大きいです。にもかかわらず、自分たちは優れていると思ひ込んでいます。自分たちが中身もないのに、自国が優れているという思い上がりがあります。キリスト者も、ともするとこんな奢りを抱くかもしれません。キリスト者だからということで、未信者よりも優れているという思い上がりを抱いているかもしれません。

6:3 あなたがたは、わざわいの日を押しつけている、と思っているが、暴虐の時代を近づけている。

これは皮肉です。自分たちが富や力を持っているので、災いの日を押しつけていると思っ
ていましたが、そのように富や力に拠り頼んでいたのが、神から離れ、それで暴虐の時代を近づけて
いるのです。自分たちが救われようとするほど、かえって裁きを招いているのです。

6:4 象牙の寝台に横たわり、長いすに身を伸ばしている者は、群れのうちから子羊を、牛舎の中
から子牛を取って食べている。6:5 彼らは十弦の琴の音に合わせて即興の歌を作り、ダビデのよ
うに新しい楽器を考え出す。6:6 彼らは鉢から酒を飲み、最上の香油を身に塗るが、ヨセフの破
滅のことで悩まない。6:7 それゆえ、今、彼らは、最初の捕われ人として引いて行かれる。身を伸
ばしている者どもの宴会は取り除かれる。

彼らの豪奢な生活を生々しく描かれています。象牙の寝台、長椅子に身を伸ばし、そして上等な
ラム肉や牛肉を食べています。そしてダビデのようにとありますが、ダビデは主を礼拝するために
楽器を奏でていましたが、彼らは余興としての音楽です。そして、酒と香油、つまり身だしなみ。け
れども、「ヨセフの破滅のことで悩まない」とあります。私たちはしばしば、「思い煩ってはいけない」
という神の命令を聞きます。けれども心配しなければいけない時があります。それは神に背いてい
る時です！ そのことについては、悩む必要があります。ヤコブがこのことを次のように言いました。
「あなたがたは、苦しみなさい。悲しみなさい。泣きなさい。あなたがたの笑いを悲しみに、喜びを
憂いに変えなさい。主の御前でへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高くしてくださいま
す。(4:9-10)」

2B サマリヤを敵に引き渡す神 8-14

6:8 神である主は、ご自分にかけて誓われる。・・万軍の神、主の御告げ。・・わたしはヤコブの誇
りを忌みきらい、その宮殿を憎む。わたしはこの町と、その中のすべての者を引き渡す。

主がついに、「その宮殿を憎む」と言われました。王の住まいを破壊せしめます。神は権威を立
てておられます。その権威がその源の神を認めないのであれば、つまり自分が神のようになって
いるのであれば、神はそれを他の権威、敵に引き渡されます。そして神の嫌われるものって何でし
ょうか？「ヤコブの誇り」です。高ぶりです。もともと忌み嫌われます。

6:9 一つの家にも十人残っても、その者たちも死ぬ。6:10 親戚の者でこれを焼く者が家から死体
を持ち出すために、これを取り上げ、その家の奥にいる者に向かって言う。「あなたのところに、まだ
いるか。」彼は言う。「だれもいない。」また言う。「口をつぐめ。主の名を口にすな。」

なぜ、「主の名を口にすな。」と厳重に注意しているかと言いますと、もし主の名を口にしたもの

なら、主からの罰がさらに行われ、自分自身も死んでしまうかもしれないからです。

6:11 まことに、見よ、主は命じる。大きな家を打ち砕き、小さな家を粉々にせよ。6:12 馬は岩の上を走るだろうか。人は牛で海を耕すだろうか。あなたがたは、公義を毒に変え、正義の実を苦よもぎに変えた。

主は、安んじていた者たちの家々を打ち砕かれていきます。そこで、彼らの贅沢がはびこり、主に抛り頼む必要を感じなくなるからです。そして再び、公義を毒に、正義の実をにがよもぎに変えらると言われていますが、これが理由なので必ず災いに会うのだということを話しておられます。因果関係として、彼らが正義を捨てたのであれば、主が彼らを守る義務もなくなっているのです。それで、アッシリヤが家々を打ち砕くままにしておかれています。

6:13 あなたがたは、ロ・ダバルを喜び、「私たちは自分たちの力でカルナイムを取ったではないか。」と言う。6:14 「まことに、イスラエルの家よ、今、わたしは一つの民を起こしてあなたがたを攻める。・・万軍の神、主の御告げ。・・彼らはレボ・ハマテからアラバの川筋まで、あなたがたをしいたげる。」

北イスラエルが、アラムの町々を自分たちのものとして取ったことを豪語しています。「ロ・ダバル」という町は実はありません。けれども、「ロ・デバル」という町はあります。ヨルダン川の向こう側にあります(2サムエル 6:14)。けれども、アモスはこの町を微妙に変えて「つまらぬ物」という意味の「ロ・ダバル」と言ったのです。そして「カルナイム」とは「力」のことですが、彼らの力はずつと虚しい物、虚しい物だ、ということです。

そして彼らがアラムの一部を取ったのだけれども、全く大きなレベルで主が報いを与えられます。ヤロブアム二世の時に主から与えられた広大な領地、レボ・ハマテからアラバ(ヨルダン溪谷)の川筋までをアッシリヤにとって取られるのです。「2列王 14:25-26 彼は、レボ・ハマテからアラバの海までイスラエルの領土を回復した。それは、イスラエルの神、主が、そのしもべ、ガテ・ヘフェルの出の預言者アミタイの子ヨナを通して仰せられたことばのとおりであった。主がイスラエルの悩みが非常に激しいのを見られたからである。そこには、奴隷も自由の者もいなくなり、イスラエルを助ける者もいなかった。」このように神が憐れみを示されたからであり、自分たちの力ではありません。自分たちがどんなに自分たちの取った土地を誇りました。けれども、主はこれをごっそり取っていかれます。それは、主がこれらの権威を与えていることを知るためです。